



会報の巻頭言

『食品包装と平和の関係』

一般社団法人 日本食品包装協会 常務理事
神崎敬三

英国のEU離脱に関するニュースは、政治的な出来事であったとは言え、国際経済に大きな影響を与えている。国民投票結果が出されるやいなや、日経平均株価は一日で1000円以上も下落、円も100円割れの大幅な円高となるなどその衝撃は記憶に新しい。そして、実際の離脱に向けて、今後どのような影響が生じるのか目をそらせない状況である。その背景には、移民・難民受け入れ問題と国民の負担増、失業リスク増、治安問題そして格差に関する我慢の限界などがあげられている。

また、宗教が絡んだテロ事件が続発しており、世界の安全が脅かされている。自己の利益を得るためではなく、純粋に海外支援を目的に奉仕として活躍していた優秀な日本人が犠牲になった事件は大変衝撃的であり、残念な出来事であった。どうしてこのようなことが起きるのであるのか。

人々の心に余裕が無くなり、善悪の正しい判断や我慢の限界高さが低くなってきていると感じる。原因は何か。その根底にあるのは貧富の差（格差）が上げられる。昔から格差はある。最近では、その我慢の限界高さが低くなり、脱出できないことに対する間違った解決手段として過激な行動がとられるようになってきているのではないか。発展途上国では、国が発展するにつれて格差意識が高まり、問題がクローズアップしてくる。ここまでは普通である。しかしながら先進国でも、格差の拡大と長期化に対する政策の不十分さが問題を生むようになった。国内で格差が問題となっているのに、移民・難民受け入れ等による外部環境の変化で、更に自己負担が増えるという懸念や不平等感の増加で我慢の限界を超えてしまい安くなっていると思う。

食品包装から話が逸れているように思われるかも知れないが、そうではない。

食品包装の目的には、適切な包装技術で食品ロスを無くすことがあげられる。食品ロスが無くなれば、製品の価格はより安価になり、より多くの人々が、平等に安全で美味しい食品を手に入れることが出来るようになる。食べ物の恨みは怖いといわれる。食品入手に関する格差が縮まることは、人々の心の平和に必ず役立つはずである。我々、包装に携わるものは単なる利益の追求ではなく、このような重要な使命があることを忘れてはならないと思う。



当協会では、包装容器の役割をより多くの人々に理解してもらうために、専門家はもちろん、食品に触れることが多い主婦や女性層も対象に『食品包装検定』を立ち上げることにした。『食品包装』は、日常生活に不可欠なものであることを改めて認識してもらう。包装容器が無ければ食品を持ち運ぶことができず、ロスが増える。内容物を示すことによって、また適切な処理や包装容器を用いることで、安心して長期保存が可能となり、ロスが減る。より多くの人々に安全で美味しい食品を行き渡らせることが出来る。食品包装は、私達の日常生活に深く係っているわりには、我が国でさえも食品包装についての体系的教育がなされていない。食品包装の重要な役割と価値を理解してもらう啓蒙活動の一環として、『食品包装検定』を行うことにした。この試みに関する皆様のご理解とご支援をお願いしたい。